

都道府県別賞一等

生きる希望

熊本市立出水中学校 二学年

岡本 一花

今でも鮮明に覚えていることが私にはある。小学五年生のとき、お母さんから

「入院しないといけない。」
と言われたことだ。

胸腺腫という病気だつた。そのときに、一瞬頭が真っ白になり、すぐに不安が押し寄せてきた。お母さんは生きて帰つてこれるのだろうか、何ヵ月会えないのかな、家はどうなつちやうんだろう……色々なことを考えた。入院したらたくさんのお金がかかることも知つていたので、これからは色々我慢しなきやとも思つた。

入院生活が始まると、祖母が家のことを手伝つてくれるようになつた。お父さんからお母さんの病状を聞き、安心したり不安になつたりした。お母さんは、入退院を繰り返しながら、克服のために抗ガン剤治療や手術を頑張つていた。そんな生活が続いた後、無事にお母さんは退院し、元の生活に戻ることができた。しかし、お母さんの入院生活の間、お金のことで私が我慢する場面がなかつたことが不思議だつた。

あれから約二年半、私はお母さんに病気だつたときの心境と家計のことを聞くことにした。まず、病気が判明したときにどのようなことを思つたのか聞いた。最初は、やはり病気の心配をしたそうだ。お母さんがなつた胸腺腫という病気は、かなりまれなものなので治るのか不安だつたと言つた。次に、家族のことについて心配したと言つた。元気にしているだろうか、学校では無事に過ごしているだろうなど、色々な心配をしていたそうだ。

しかし、経済的なことについては、あまり心配をしなかつたそうだ。どうしてか聞くと、生命保険に入れていたことが大きかつたと言つた。

お母さんは、ガンや脳卒中、急性心筋梗塞になつたときに保険金が一部前払いされる保険に二十代の頃加入していた。その頃は『この保険を使うときは私的人生終わりだ。』と思ひながら加入し、知人からも「誰かが助けてくれるからそこまでの保険はいらないよ。」
と言われたそうだ。その頃のお母さんもまさか病気になるとは思つていなかつたと、今のお母さんは言う。それから二十年以上が経ち、病気が判明したとき、『この保険に入つていてよかつた。』と思つたそうだ。

第59回中学生作文コンクール

保険が適用された後、一部前払いの保険金の他に通院や入院、手術などに必要なお金をもらえたので、電動ベッドやウイッグなどの必要なものを買えたと言う。また、お母さんは入院中、病気を治して家に帰つたら色々なことをしたいと思い、つらい治療も頑張れたそうだ。その“生きる希望”を持ったり、叶えたりするためにも、生命保険はとても大切なものであり、それがあつたことで治療に専念することができたとお母さんは言つた。

お母さんに当時のことについて聞いてみて、保険は“のこされた人のための保険”でもあるけれど“生きるための保険”でもあると思った。病気にならないことが一番だし、健康はお金では買えないけれど、何かあつたときに自分や家族が安心して生活するためには、保険が大切だと思う。また、自分に合つた保険を知つたり、保険について調べたりすることも、これから的人生で役に立つと思つた。

今では、お母さんの病気はだいぶ回復し、家族で楽しく過ごすことができている。これからも、こんな日常が続けば良いなと思う。